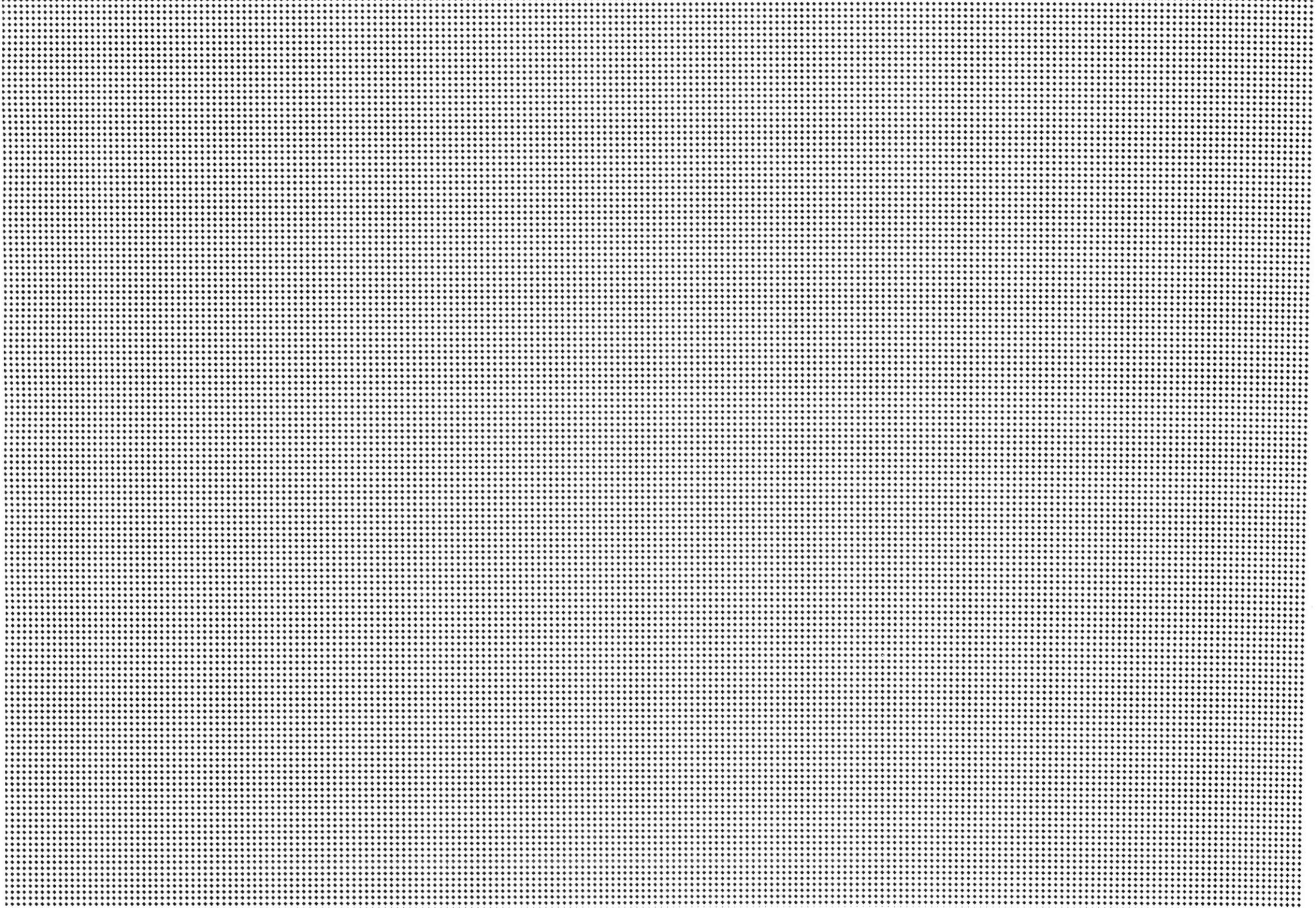


平成31年度 東京都立立川高等学校 推薦に基づく入学者選抜

小論文

注 意

- 1 開始のチャイムが鳴るまでこの問題用紙を開いてはいけません。
- 2 問題は **①**, **②** で **3ページ** にわたって印刷してあります。
- 3 検査時間は **50分** で、終わりは **午前9時50分** です。
- 4 声を出して読んではいけません。
- 5 答えはすべて解答用紙に**横書き**で**明確に記入**し、**解答用紙だけ**を提出しなさい。
- 6 答えに字数制限がある場合は、**、や。や「**などのほか、**書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ1字と数えなさい**。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。



1 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

アナログとかデジタルという言葉も、もう普通に使われる言葉になってしまった。デジタルはディジット、つまり指に由来する言葉である。指折り数えるというような、離散的な量の表示である。

アナログは連続量と訳されることが多いが、もともとはアナ（類似の）とログ（論理）に由来する言葉である。ある量を別の何かの量に変えて表示すること。時間という連続量を、文字盤の上の針の角度で類似させたり、温度を水銀柱の高さで近似させたりする、これらがアナログ表示。いっぽう、デジタル時計では、連続量である時間を数値化する。標本化するのだと言ってもいいだろう。連続量を離散量に標本化する作業だから、どんなに細かく区切っても、量と量のあいだには空隙くうげきが残る。

われわれはアナログの世界に生きている。1分、2分という区切りに関係なく時間は私のなかを流れているし、空気にもその匂いにも境目はなく、数えることはもちろんできない。

そんな世界にあって、感覚としてアナログを捉えることはできても、それを表現することはできないものである。表現した途端にそれはアナログからデジタルに変換されてしまうからである。アナログ世界は表現不可能性のなかでのみ成立しているとも言える。「今日は38度もあった」と言えば、38度という数値は理解できるが、その人が感じている暑さは、38という数値のなかにはない。

何も数値化だけがデジタル化なのではなく、言葉で何かを言い表わす、そのことがすなわちデジタル化そのものなのである。言葉で表わすとは、対象を取り出して、当てはまる言葉に振り分ける、すなわち分節化する作業である。外界の無限の多様性を、有限の言語によって切り分けるという作業なのである。

人は自分の感情をうまく言い表わせない時、言葉のデジタル性を痛感する。

(永田和宏 「知の体力」による)

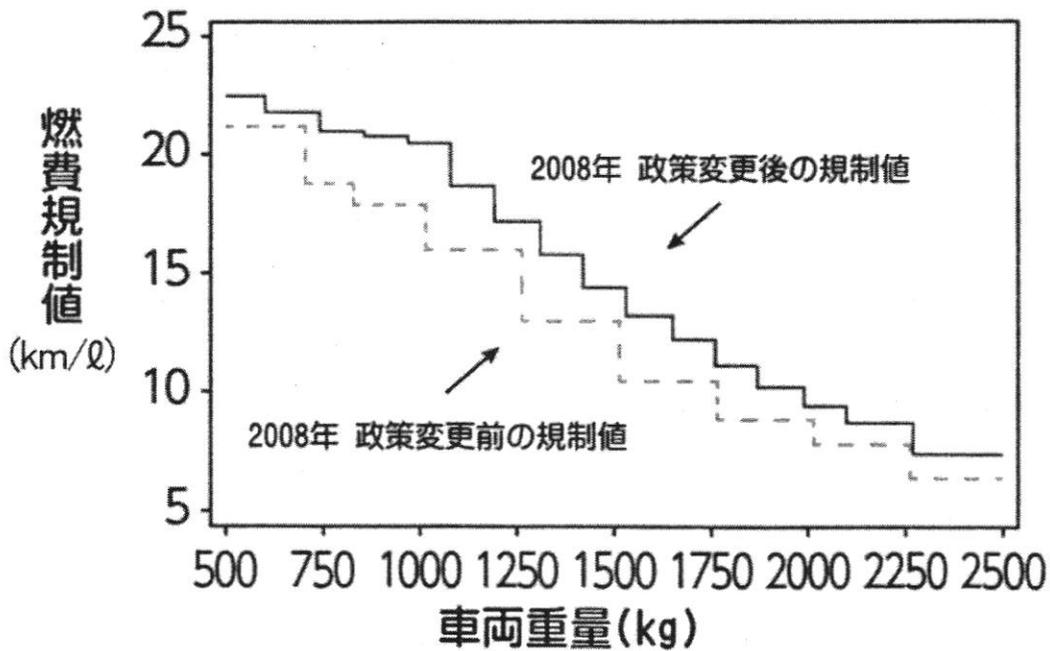
[問] 本文を読んで、あなたは、人はどのような点に注意してコミュニケーションをとるのがよいと考えるか。下線部「言葉のデジタル性」について説明した上で300字以上360字以内で論じなさい。なお、論の展開に応じて段落分けを行うこと。

2 次の文章を読んで問いに答えなさい。

わが国では地球温暖化対策などの必要から自動車の燃費規制を国で定めています。燃費規制では燃費の目標値を設け補助金を出したり、目標値を下回る場合は罰金を科したりしています。具体的には車両重量により燃費規制値を段階的に決めています。また、図1で見るように 2008 年には、政策変更が行われ、規制の段階に修正が加えられました。図2、図3は政策変更前及び後の国内自動車販売台数をヒストグラムにしたものです。

図1～図3を読み取り、わが国における自動車の燃費規制と、そこから考えられることを述べなさい。

図1 日本の燃費規制



[注] km/l — 自動車1台が燃料1ℓで走行できる距離 (km)

図2 燃費規制値と自動車の分布 2001～2008

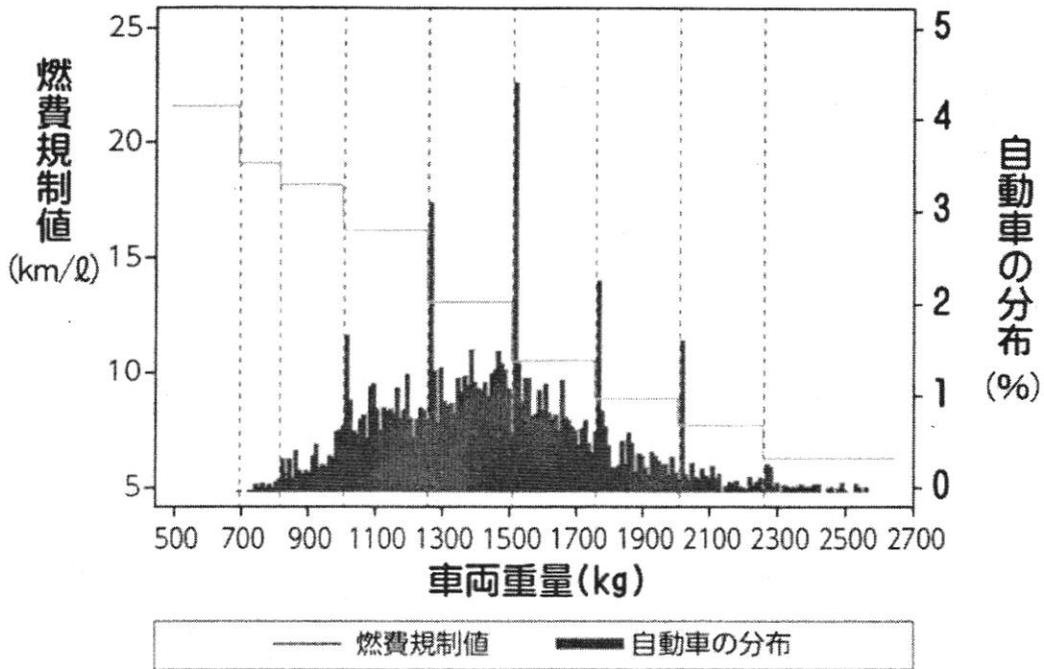
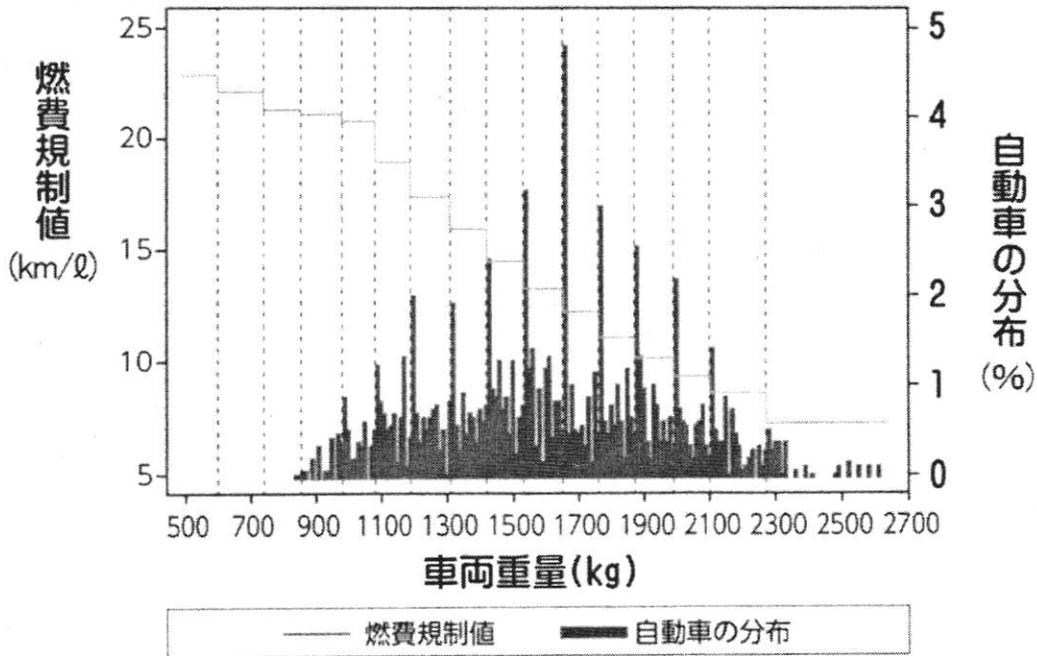


図3 燃費規制値と自動車の分布 2009～2013



(伊藤公一朗 「データ分析の力 因果関係に迫る思考法」による)

問題は以上です。